



兵庫県埋蔵文化財情報

ひょうごの遺跡

平成19年
7月20日発行

64号

兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589 FAX079-437-5599
ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~kokohaku-bo/>



何回も建て替えられた
竪穴住居跡群を発見

1 いちのこう 市之郷遺跡

姫路市日出町3丁目

弥生時代から古墳時代にかけての
竪穴住居跡28棟を発見しました。同
じ場所で、少しずつ場所を移し、幾
度かにおよんで建て替えられている
のが特徴で、住居跡が重なっていま
す。

～ 幾度も建て替えられた竪穴住居跡を発見 ～

県営住宅建て替えに先立ち、市之郷遺跡（仮称姫路駅周辺第3地点）の発掘調査を行いました。調査の結果、弥生時代前期から古墳時代後期にかけて、当地において人々が生活していたことが明らかとなりました。特に、弥生時代後期（約2000年前）と古墳時代後期（約1400年前）の竪穴住居跡がたくさん見つかりました。

■ 弥生時代の市之郷遺跡



2200年前の水路

約2000年前の竪穴住居跡が7棟見つっています。そのなかの数棟からは、多量の土器が見つっています。また、火災にあった状態の住居跡も見つっています。

住居跡に他に、弥生時代前期（約2200年前）まで遡る大規模な水路跡も見つっています。当地が、約2200年前から開発されていたことを示す貴重な発見です。



■ 古墳時代の市之郷遺跡

竪穴住居跡が21棟、掘立柱建物跡が5棟見つっています。竪穴住居跡は一辺10mを超えるものがあり、当時の住居跡としてはかなり大型です。

また、掘立柱建物跡も、柱穴の直径が1m近くのものもあり、これも当時としては大型です。以上から、古墳時代の市之郷遺跡には、かなり有力な豪族が住んでいたものと推定されます。これらの人たちが、白鳳時代に築かれる市之郷廃寺建設の母体となったのではないかと考えられます。



重なり合う住居跡

東播磨の後期古墳

5基から成る古墳群を調査しました。昨年度は隣接する1号墳を、今年度は2～5号墳を調査しました。播磨国風土記の望里^{まがりのさと}に所在し、近くには西条古墳群や西条廃寺などの遺跡が多くあります。東側250mのところには銅鐸^{どうたく}が出土した望塚^{ほんづか}があります。後期の古墳群は現状では1～5基程度の小規模な古墳群が知られている程度です。戦後の開墾などによって相当数の古墳が破壊されたようで、今回のような半壊状態の古墳が田畑の下にまだまだ埋没している可能性があります。

すべて円墳で1枚の水田に密集しており、2号墳が最も大きく径18mを測ります。裾が接するような状態で確認されたことから、計画的に築造されたものと思われます。2号墳が最初に築かれ、次に4号墳、そして3・5号墳の順に造られたようです。古墳の大きさは徐々に小さく、そして石室も小さくなっていきます。時期的には大きな開きはなく、すべて7世紀前半の古墳です。横穴式石室が残っていたのは、2・4号墳ですが、3・5号墳も石材が一部残っており墓壙^{ほこう}の形状からも横穴式石室であったと思われます。

特徴的なものは墓壙から続く墓道です。断面U字形の溝が調査区外まで延びています。ただ、1m前後と

2号墳横穴式石室



4号墳横穴式石室



深いことから、古墳築造にも関わるものと考えています。4号墳は墓道に須恵器壺が置かれていましたが、これなどは墓前祭祀の典型例かと思われます。遺物は須恵器と勾玉^{まがたま}・鉄鏃^{てつそく}・耳環^{じかん}が出土しています。



水田の下から4基の埋没古墳

■但馬の終末期の横穴式石室

南但馬で最も広い水田を持つ加都を望む丘陵に築かれた古墳群です。平地に加都遺跡・片引遺跡が丘陵上に筒江中山古墳群・茶すり山古墳が見られます。尾根上の標高の高い部分に築かれた古墳は箱式石棺を埋葬施設とする古い4～5世紀の古墳です。尾根上や山腹に後期～終末期の古墳が築かれています。今回は4基の古墳の調査を行いました。すべて横穴式石室を主体部とする古墳です。墳丘は明瞭ではないが、列石の形状から方墳を意識しているのではないかと考えられます。

調査区周辺で採取される石材を使って小規模の横穴式石室をつくっています。明らかな袖部を持たない無袖式の石室です。奥壁の幅よりも開口部の幅の方が広いのも特徴です。石室開口部から石列が回っていますが、墳丘斜面の低い方にだけ石を置いています。石室の規模は長さ2.6～4.6m、高さ0.6～1.0mと小形です。奥壁から1m近くまで礫を敷いており、棺を置く部分と思われます。遺物は須恵器・鉄器（釘・鎌・馬具）が出土しています。須恵器の年代から8世紀になってからも古墳を築造していることが明らかになりました。上エ山古墳群では7世紀の後半に横穴式石室を主体部とする古墳が築かれ、8世紀はじめまで石室がつくられています。規模は新しいほど小さくなっています。古い古墳の墳丘の上に小規模の古墳を築いています。



3区全景 調査区周辺で採取される石材を使って小規模の横穴式石室をつくっています。明らかな袖部を持たない無袖式の石室です。奥壁の幅よりも開口部の幅が広いのが特徴です。



3区4号墳調査風景 石室が小さいことがわかります。



3区4号墳石棺 1基だけ石室内に箱式石棺を設けています。石室側壁を利用してつくる新しいタイプの石棺です。

2区1号墳 墳丘は明瞭ではありませんが、列石の形状から方墳を意識していると思われます。



東播磨の加古川市天王山古墳群と南但馬の朝来市上エ山古墳群で古墳時代後期から終末期の古墳を調査しました。ともに横穴式石室を埋葬施設とするものです。今まで思っていたより新しい時期に造られたことがわかりました。古墳時代終末期の畿内周辺部の状況の一端がうかがい知れる資料です。



平成18年度の調査は、C地区（西側）とD地区（東側）の2地区に分けて実施しました。

そして、C地区では鎌倉時代（13世紀）の道具小屋と考えられる掘立柱建物跡、D地区では平安時代（8～9世紀）の掘立柱建物跡がそれぞれ1棟見つかっています。上の写真はD地区の建物跡です。

遺物では、土師器、須恵器の他、輸入磁器が出土しています。

5 そがい のいり 曾我井・野入遺跡

多可郡多可町曾我井

A地区とB地区の2ヶ所で調査を行いました。A地区は谷、B地区は丘陵上に位置しています。

A地区では柱穴の他、土器を捨てた穴も見つかりました。谷に溜まった土から古墳時代（7世紀）～鎌倉時代（13世紀）の土器が見つかっています。

上の写真はB地区のもので、ここでは鎌倉時代のものと思われる柱穴が400基近く見つかりました。これは同じ場所で何回も建物が建て替えられたためと考えられます。





山田地区航空写真（上が南）

山田地区では平成17・18年度の2 ヶ年にわたって調査を行いました。

大歳遺跡

平成17年度の調査では鎌倉時代前半の掘立柱建物跡などが見つかりました。

今回の調査で鎌倉時代だけではなく、平安時代の遺物も出土しています。

中でも、2 点出土した石帯は淡路市内では初めての出土例です。



石帯（大歳遺跡）

宇和田遺跡

平成17年度に引き続いて調査を行いました。前回の調査では鎌倉時代前半の掘立柱建物跡と江戸時代の土坑が見つかっています。今回の調査では江戸時代の土坑が見つかったほか、中世まで遡る区画溝が検出されました。

七反田遺跡

鎌倉時代の掘立柱建物跡 1 棟の他、奈良時代に遡る溝が見つかっています。また、遺物ではサヌカイト製の石鏃や石剣といった弥生時代の石器も見つかっています。



調査区航空写真（宇和田遺跡）

溝跡（七反田遺跡）



建物跡（七反田遺跡）

鎌倉時代の有力農民の屋敷



調査区航空写真（上が西）



久保ノ向遺跡は、大きく蛇行している都志川の川筋を一部直線的に改修する事業に先立って発掘調査を行いました。現在の水路を中心に調査区を東西に分割し、東側がⅠ区、西側がⅡ区です。

調査の結果、鎌倉時代の集落跡が見つかりました。

Ⅰ区を中心に900基近い柱穴が見つかり、現在のところ24棟の建物跡を復原しています。また、建物に近接して、墓ではないかと思われる土坑もみつっています。そのうち、下左の写真は火葬墓と思われる土坑で、底には平たい石が敷き並べられていました。下右の写真は土葬墓と思われる土坑で、土師器の皿が何枚も供えられていました。

掘立柱建物と柱穴



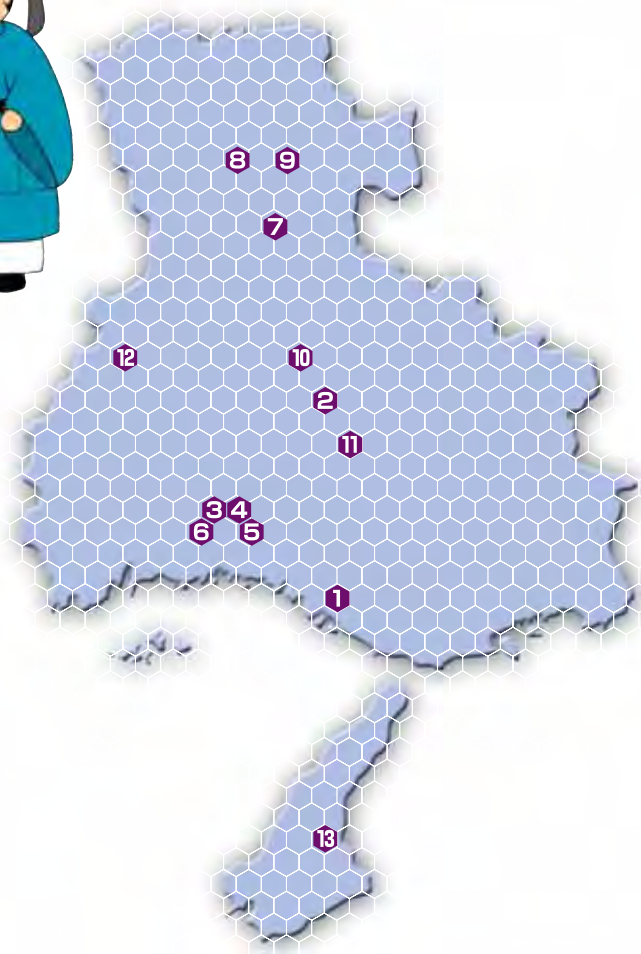
火葬墓



土葬墓



平成19年度調査予定の主な遺跡



- ① 坂元遺跡・他（加古川市）
弥生時代～中世の集落跡、古墳時代の墓
- ② 津万遺跡群（西脇市）
中世の集落跡
- ③ 西延末遺跡（姫路市）
弥生時代～古墳時代の集落跡
- ④ 仮称姫路駅周辺第3地点（姫路市）
弥生時代～古墳時代の集落跡
- ⑤ 市之郷廃寺（姫路市）
弥生時代～古墳時代の集落跡
- ⑥ 英賀保駅周辺第4地点（姫路市）
平安時代～中世の集落跡
- ⑦ ナベ遺跡（養父市）
縄文時代～中世の集落跡
- ⑧ 小河江窯跡（豊岡市）
奈良時代の窯跡
- ⑨ 鳥居城跡（豊岡市）
戦国時代の城跡
- ⑩ 曾我井・沢田遺跡（多可町）
平安時代～鎌倉時代の集落跡
- ⑪ 田中・夢原遺跡 他（加東市）
弥生時代～鎌倉時代の集落跡
- ⑫ 延吉遺跡（佐用町）
縄文時代～鎌倉時代の集落跡
- ⑬ 下加茂遺跡（洲本市）
弥生時代の集落跡

県立考古博物館
10月13日開館



◆お知らせと編集後記

組織の改編に伴い、今年4月より兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となりました。今年度当初は昭和59年から事務所が置かれていた神戸市兵庫区で考古博物館荒田事務所として業務を行って参りましたが、6月末を持って神戸市を離れ、7月からは加古郡播磨町で名実ともに考古博物館の一翼を担っていくことになりました。

なお、『ひょうごの遺跡』は埋蔵文化財調査部が行う発掘調査、出土品整理の情報を中心に、これからも考古博物館の情報誌として発行していくことになりましたので、今後ともご期待下さい。

64号では前号に続いて平成18年度の発掘調査成果を紹介することになりました。発掘調査件数が減少したとはいえ、1年間の成果をお知らせするには1号分のスペースではとても足りなかったためです。また、山本亮司さんたちによるイラストも添えてみました。皆さんの感想はいかがでしょう。（BM）